

帝国論・帝国主義論の補足(メモ)

帝国論・帝国主義論の流行

帝国	Empire
帝国主義	Imperialism

19 / 20世紀転換期に「帝国」論ブーム

今日の流行の意味

アメリカは帝国 / 帝国主義国か

世界資本主義の現段階は帝国 / 帝国主義で分析できるか？

20世紀はじめに流行した「帝国」論のなかで生き残った「古典」

[ホブソン著矢内原忠雄訳『帝国主義』\(岩波文庫、1951年\)](#)

「過少消費」の経済的帰結としての海外膨張(帝国主義)→レーニンの先駆としての意義
学際的分析(政治社会学的背景)にも特徴

[大水善寛氏の論考「J.A.ホブソンと『帝国主義論』」などを参照。](#)

[レーニン著宇高基輔訳『帝国主義』\(岩波文庫、1956年\)](#)

資本主義発展の最高段階(独占資本主義論)として捉える。

1950年代

[ギャラハー＆ロビンソン『自由貿易帝国主義』・『非公式帝国』論](#)(Gallagher, J. and R. Robinson(1953), "The Imperialism of Free Trade." *Economic History Review*, 2nd series, Vol. VI, No. 1.)

資本主義的な経済空間を確保するための政策としての帝国主義

可能なら非公式(informal)に、必要ならば公式(formal)に

自由貿易・非領土的経済膨張主義と植民地主義(公式帝国)は手段の違いに過ぎない

植民地を必要としない帝国主義(新植民地主義論)

植民地・第三世界側で帝国主義と協力する政治エリートへの注目(協調理論)

につながる

ウィリアムズ『門戸開放帝国主義(Open Door Imperialism)』([ウィリアム・アッブルマン・ウィリアムズ著・高橋章ほか訳『アメリカ外交の悲劇』御茶ノ水書房、1986年](#))

ヴェトナム戦争が背景

「非公式帝国」論を用いたアメリカ帝国主義論
領土的 / 非領土的膨張主義の連続性(反帝国主義の膨張主義)

1960年代

一連の世界資本主義論

アンドレ・G・フランク「世界資本主義と低開発」論(フランク著・西川潤訳『世界資本主義とラテン・アメリカ』岩波書店、1978年)

サミール・アミン「周辺資本主義構成体論」(アミン著・西川潤訳『不均等発展:周辺資本主義の社会構成体に関する試論』東洋経済新報社、1983年)

中心 / 周辺概念

低開発・周辺資本主義

大航海時代以降の近代500年を俯瞰する視点

1970年代

エマヌエル・ウォーラーステイン「近代世界システム」論([ウォーラーステイン著・川北稔訳『近代世界システム』岩波書店、1981年](#))

社会史的長期波動の視点と世界資本主義史論を総合

覇権(hegemony hegemony)概念を提起

覇権の移行(オランダ→イギリス→アメリカ)のメカニズムに注目

一連のイギリス帝国論

[パトリック・オ布莱エン\(秋田茂ほか訳『帝国主義と工業化』ミネルヴァ書房、2000年\)](#)

「国際公共財(international public goods)」の提供者としての覇権国家

ジェントルマン資本主義論([P.J.ケイン、A.J.ホブキンス著・木畑洋一ほか訳『ジェントルマン資本主義の帝国 I・II』名古屋大学出版会](#))

イギリス帝国主義(海外膨張)の担い手として工業部門よりもシティ(金融センター)の役割やそれを支えた土地貴族層の役割を重視。

21世紀はじめ

[アントニオ・ネグリ&マイケル・ハート著・水嶋一憲ほか訳『帝国』](#)

ネットワーク型・脱中心 / 周辺関係的な権力概念としての「帝国」

グローバリゼーション時代に対応した世界資本主義論

脱国民国家的状況の説明に優れる一方、国民国家の役割の捉え方には問題